

ガリラヤ湖のほとりに集まってきた人々に神の国のたとえ話を語り聞かせ終えてから、「向こう岸に渡ろう」と言われて、イエスは弟子たちの舟に乗り込まれたと今日の福音には語られています。このようにしてイエスはくる日もくる日も、新天地に新たな人々との出会いを求めて神の国の福音を宣伝して行かれます。弟子たちはそのイエスを自分たちの舟にお乗せして、湖に漕ぎ出すのです。ガリラヤ湖の漁師であった弟子たちには、湖の空模様はよく分かっていたはずですが、彼らには嵐が近づいていることがわかっていたことでしょうか。けれども、イエスが向こう岸に渡ろうと言われるので、彼らは大急ぎで舟を漕ぎ出したのです。案の定、湖は荒れ初めて、とうとう暗黒の波に弄ばれて弟子たちの乗った舟は今にも沈みそうになります。弟子たちがこのとき暗黒の嵐の海で経験したことは、その後の現在に至るまで、イエスの教会の船に乗り込んだ者たちが幾度となく経験していることを先取りしているように思えないでしょうか。そしてまた、天地の境も見極めることができない、そのときの状況は、後で思い返すと、創世記に語られている天地創造以前の混沌の海を思い起こさせるような有様でもあったことでしょうか。そのような状況の中で気がついてみるとイエスは眠っておられるのです。「わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言うそのときの弟子たちの叫びには、そのような危機の中で眠りこけておられるイエスに対する苛立ちが込められているように思えます。それもまた、イエスを信じる者たちが経験してきた、何の助けも示そうとはなさらないイエスに対する不信を表しているようにも思えます。イエスが十字架の上に死んでしまわれたとき、弟子たちは今度こそ、自分たちが決定的に嵐の海に投げ出されてしまったと思ったことでしょうか。しかし、墓の暗闇の中に永遠の眠りについてしまったと誰もが思ったイエスは、かねて言われたいたとおりに、わたしたちの誰もが行きつく死の暗闇を打ち開いて、弟子たちのところに来てくださったのです。「なぜ恐れるのか。まだ信じないのか」。死の闇を打ち開いて復活されたイエスのこのおことばをわたしたちも幾度となく聴かなければならないのです。

「この方はどなたなのだろう」、あの時、弟子たちが口にしたこの驚嘆のことばがわたしたちの口からも出ることを願わずに入られません。イエス・キリストを信じるとはこのようなことです。波猛ける嵐の中で、天地の創造主である父に身を委ねて幼子のように眠っておられるイエスが示してくださっている、全てのものの創造主である父なる神を信じる信仰をわたしたちもわたしたちを

取り巻き、襲い掛かってくる危機の中で願い求めたいともいます。「黙れ。静まれ」と逆巻く波に向かって叱咤されたイエスの御声が、些細なことで波立つわたしたちの心の嵐を鎮めてくれることを願い求めたいと思います。

イエスにつき従う旅路のなかで弟子たちは神を信じて生きるとはどのようなことであるのか学んでいったのです。弟子たちとともに歩むイエスの旅は弟子たちの信仰を育てるための旅であったのです。「なぜ恐れるのか。まだ信じないのか」。幾度となく弟子たちの不信仰ぶりを目にしても、ご自分が選り出された弟子たちをお見捨てにならないイエスの導きに信頼して、イエスの御後に従う信仰の道を歩んでゆきたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高